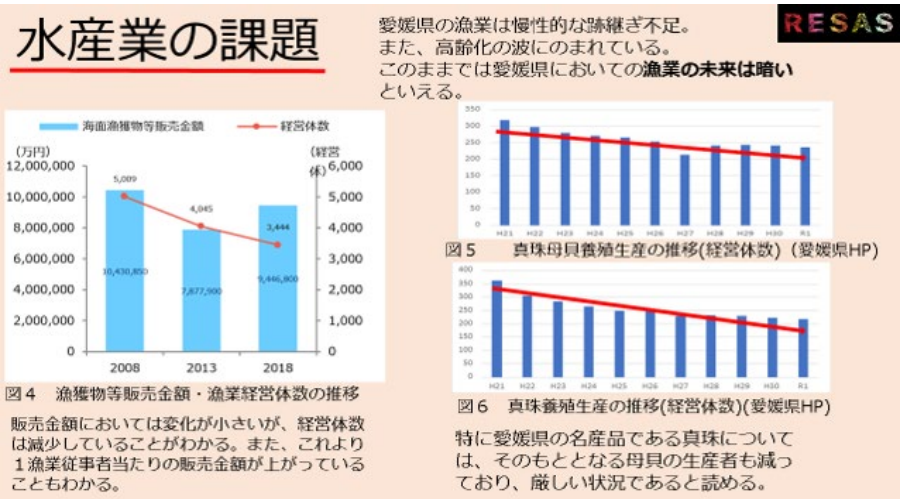
地方創生を目指したお菓子の商品化がついに実現！
松山東高等学校の皆様が、岡田地方創生担当大臣に報告しました。

地方創生☆政策アイデアコンテストは、地域経済分析システム（RESAS:リーサス）や V-RESAS を活用した課題分析に基づく様々な政策アイデアを募集しています。

地方創生☆政策アイデアコンテスト 2021 に高校生・中学生以下の部で最終審査会に出場した愛媛県立松山東高校の皆様が、コンテストで提案していた地元の特産品である真珠を用いたお菓子の商品化を実現され、この度、2023 年 3 月 3 日に岡田直樹内閣府特命担当大臣（地方創生）へ報告しました。

― 報告会に参加されたのは、松山東高校の谷村琉凪（たにむら るな）さん、尾崎脩（おざき しゅう）さん、赤松瑞夏（あかまつ みずか）さん、株式会社一六の矢野啓子（やの けいこ）さんです。
谷村さん、尾崎さん、赤松さんから、まずは本取組に至った経緯をご説明いただきました。

谷村「私たちは総合的な探究の時間で地方創生について学び、愛媛県の課題について調べました。そして、慢性的な人口減少や、愛媛県の重要な産業の一つである真珠養殖業の経営体数の減少、アコヤガイの大量死などについて知りました。私たちの活動は、それがきっかけで始まりました。私たちの活動の目的は、愛媛県の真珠養殖業を県内外に発信し、さらに若い世代を含め多くの人に真珠に触れてもらうきっかけをつくることです。さらに、愛媛の良さを知ってもらうことで、人口増加にもつながるのではないかと考えました。」



赤松「目的達成のため、私たちが注目したのは、パールパウダーという新たな資源です。パールパウダーとは、真珠のアコヤガイという貝の内側の真珠層を粉砕して作られたものです。真珠は高級な宝石というイメージがありますが、パールパウダーには、本来の真珠が持つ、既成概念以外の活用方法があります。環境に優しい上に、真珠を食べられるという大きなインパクトが地方創生のカギになると私たちは確信しました。そこで、パールパウダーの活用によって、普段真珠に触れない人にも真珠をより身近なものに感じてもらいたいと思い、地方創生へのアイデアを練りはじめました。主に RESAS と V-RESAS から見えた愛媛県の課題をもとに、パールパウダーと結婚式を掛け合わせた地方創生のアイデアを内閣府主催の地方創生☆政策アイデアコンテストに応募させていただきました。選考の結果、四国経済産業局長賞と企業協賛賞を私たちはいただくことができました。そこで終わることはなく、私たちは、ここでのアイデアを形にしたいということで、一六本舗様にお菓子開発のご依頼をさせていただきました。」

尾崎「広い世代に受け入れられるお菓子を目指して、一年以上の開発期間をかけました。お菓子開発をする中で、実際に、宇和島市にも視察へ行き、宇和島市役所様や、土居真珠様から真珠養殖業の現状について貴重な生の声を聞きました。今回、使われている藻塩の生産者様にもお話を伺いました。一六本舗様と熱心に議論を重ね、試作を何度も繰り返していただきました。こうして、愛媛県の特産品を七色で表現した YUMEHIME が完成しました。パールパウダーは全色に使用されています。YUMEHIME という名前には、英語で“おいしい”という意味の「YUM」と「EHIME(愛媛)」が掛け合わされたものです。またこのお菓子に込められた地方創生の「YUME(夢)」も表現しています。」

谷村「私たちだけでは何も成し遂げることはできませんでした。たくさんの方々のご協力があったからこそ YUMEHIME が生まれました。活動中に多くの人々との交流を通して愛媛の素晴らしさを再認識し、私たちの愛媛愛はさらに大きくなりました。私たちの想いは、大好きな愛媛が時代に合わせた進化をしながらも、いつまでも変わらない情熱や人々の温かさを育み続けることです。このような想いを白いハートに込めました。YUMEHIME がきっかけで愛媛に興味を持っていただけることを願っています。」

― 報告後は、岡田大臣も実際にお菓子を試食しました。

谷村「YUMEHIME を試食していただきたくて、お持ちしました。」

岡田大臣「ありがとう。これを楽しみに待っていたよ。」

谷村「どうぞお召し上がりください。」

岡田大臣「まず一口目は、鯛みかんというのを食べたいのだけれども、どれだろうか。」

谷村「これになります。」

岡田大臣「では、いただきます。口の中で溶けていく感じがとっても良い。鯛の味もみかんの味もしっかりしていて美味しい。ありがとう。」

岡田大臣「伊予柑はどれだろう。伊予柑は大好きで、愛媛にいる仲間にもらうこともある。うん、やっぱり愛媛の柑橘類はいいですよね。甘さと香り、両方を兼ね備えていて美味しい。」

岡田大臣「一六本舗さんも、このアイデアを実際にお菓子にするにはいろいろご苦労もあったと思いますが、いかがですか。」

矢野「はい、2021 年 12 月くらいに学生の皆さんからお話をいただいて、実質 1 年ほど、開発に時間をかけました。学生の皆さんと打合せをしながら何回も試行・改良しました。私たちも学生の皆さんとやり取りをする中で、地方創生の大事さや、地元の特産品をお菓子にして発信することの大切さを学ばせていただきまして、今回はチャレンジできて良かったと思っております。」

岡田大臣「地方創生担当大臣として御礼申し上げます。」

岡田大臣「皆さんは今 2 年生とのことですが、1 年生の時から、取り組んでいるのですか？」

谷村「はい、1 年以上かけて開発をしました。」

岡田大臣「最初に RESAS で分析をした際は真珠で結婚式を盛り上げるというアイデアだったようですね。コロナでブライダルがすごく厳しくなったけれど、そういうのを意識したの？」

谷村「はい、それも RESAS から読み取って、これはどうにかしたい、盛り上げたいと思って、真珠とコラボするアイデアをコンテストに提出しました。」

岡田大臣「愛媛県のなかでも真珠というと宇和島なのですか？」

谷村「はい、やっぱり宇和島の真珠が有名です。」

岡田大臣「さっき、真珠をパールパウダーにすれば食べることができると伺った。パールパウダーって前からあるのですか？最近使われるようになったのかなあ。」

尾崎「化粧品とかで使われています。土井真珠さんが食用の許可をとられて、僕たちが使えるようになりました。」

岡田大臣「なるほど。一六本舗さんや土井真珠さんといった事業者の方々や、宇和島市役所、経済産業省四国経産局とも話をして、内閣府とも相談をして、この地方創生のアイデアを組み合わせてもらったということですね。そういう大人の人との話は難しくなかった？」

谷村「最初は緊張しましたし、どう対応したらいいのかわからなかった。」

岡田大臣「そうだよね、うん。」

尾崎「ただ、一六本舗さんがものすごく優しく接してくれて、だんだん自分たちの言いたいこともちゃんと言えるようになり、最終的にはすごくいい議論ができました。」

大臣「頼もしいなあ。最初はオンラインでやり取りしていたときもあったのですか？」

赤松「部活の関係等で直接一六本舗さんにお伺いできないときもありましたが、できるだけ対面で、試食や議論を繰り返しました。」

土居真珠様へ取り組みを報告

真珠養殖の現場を視察

宇和島市役所にてリモート会議

宇和島市役所の皆様と記念撮影

岡田大臣「今２年生、コロナの真最中に高校に進学したわけですよね。このコロナの影響から自分たちで抜け出したいという想いもあったのかな。それと、このふるさと愛媛も良くしたい、元気にしたいという想い。それから、最初は結婚式をテーマにアイデアを作り上げていたようだけれども、そういうブライダル産業のように困っている人たちを助けたいという想い。そういう想いからの行動、それが地方創生という、僕たちがやっている仕事です。それを高校生が中心となって実現してくれたことはとても嬉しいし、全国の都道府県や市町村でもそういう取り組みが出てきたら良いと思っている。今日は来てくれて大変嬉しい。」

岡田大臣「”YUMEHIME”っていう名前も良いけど、これは誰が考えたのですか？」

谷村「私が考えました。」

岡田大臣「単純に”夢”と”愛媛”だと思ったが、先ほどの説明では違う意味もあったようだね」

尾崎「英語で美味しいという意味の”YUM”を入れています。」

谷村「本来”YUMMY”が正しいのですが、ちょっとカジュアルな”YUM”という言葉があります。もともと”ゆめ”を名前に使いたいと思っていました。候補として”ゆめだま”等もありましたが、最終的に”ゆめひめ”に決まりました。」

岡田大臣「三越の全国銘菓展で商品を出されたと聞いていますが、売れ行きはいかがでしょうか。」

矢野「地元の店舗と三越日本橋本店、合わせて限定 500 個で出しておりますが、３月１日から発売し始めてこの２日間でほぼ完売しております。おかげさまですごく売れ行きは好調です。」

岡田大臣「ほかにも全国銘菓展でたくさんお菓子が出ていると思いますが、こういう若い人たちが作った地方創生のお菓子はなかなか少ないのではないですか？」

矢野「そうですね、やはり注目されています。午前中に、学生３人とともに売り場に行きましたが、他のメーカーさんにもよく声をかけていただきました。販売担当者からも注目度はすごく高いと聞いています。」

岡田大臣「この３年近く、コロナでみんなが大変な思いをしている。そんな中で東京はまだにぎやかだけど、地方がだんだん寂しくなっている。できることなら生まれ故郷に住み続けて、そこで勉強してそこで仕事してほしい。今はリモートでも色んな仕事ができる、テレワークの時代だ。愛媛やふるさとがあればそこに戻って、東京での仕事を辞めずに地方に住んでもらえたら、人口減少にも歯止めがかかる。そういうことを大人も一生懸命頑張るが、本日は若い皆さんが頑張っていることを知って大変嬉しく思う。」

岡田大臣「それぞれの将来の夢を一言ずつ聞かせてくれないだろうか。」

尾崎「僕はお金に興味があるので、経済学部に行ってお金のことを勉強して、将来は公認会計士を目指したいと思っています。」

岡田大臣「いい仕事だよね。公認会計士の試験は結構難しいけど、頑張って。」

赤松「僕は、海とか生物に興味があるので海洋系が学べる大学に進学して、水産業について学んで、将来は地元愛媛で養殖業ができたらなと思っています。」

岡田大臣「そうですか。それじゃあ今回のプロジェクトは夢が膨らむきっかけになったね。」

谷村「私はまだ具体的には決まっていないのですが、愛媛が大好きなので、仮に外に出てもまたいつか愛媛に戻って、愛媛のために貢献したい。多くの人が大好きな愛媛であり続けてもらうために私ができることを探していきたいです。」

岡田大臣「愛媛愛だね。今思いついたけれど、”愛媛愛”ってどっちから読んでも愛媛愛だね。」

岡田大臣「中村知事にもこの間会いに行ったと聞きました。」

矢野「先日、2月28日に報告会を実施しました。」

岡田大臣「岸田総理とも会ったことがあるのですね。松山東高校に岸田総理が訪問した際、谷村さんが説明役をされたとのことですが、これ、緊張しなかった？」

谷村「とても緊張しました。」

岡田大臣「僕でも緊張するよ。すごいなあ。ICT を活用した模擬授業。タブレットを使った授業を体験。そのあと、生徒や先生と車座対話。岸田総理は"地方こそデジタルによって変わっていく潜在力があると感じた"と、発言したのですね。今、地方創生と、デジタルの力を組み合わせて、デジタル田園都市国家構想というものを進めています。大都会も魅力的なので、若い人達は、一度は都会で勉強や仕事をしたいと思うかもしれないが、地方にも魅力がある。僕は石川出身ですが、金沢があって城下町で、食べ物が美味しいし、松山とも共通点があると思っている。やはり自分たちのふるさとで頑張って住み続けてほしいなと思います。そういうことをデジタルの力も活用して推進するということが、この岸田総理の大きな目標です。」

岡田大臣「岸田総理は視察に行って若い人の意見を聞くと元気になるみたいです。この前、石川県の小松という僕の地元に来ていただき、小松製作所というブルドーザー等の大きな建設機械を作っている会社の若手の社員と車座対話をしました。そこは女性も男性も育児休暇がすごく取りやすくて、ほどよく田舎なので子育ての環境が整っていて出生率も高い。総理は"小松モデル"として若い人たちに地元に定着してほしいですね、ということを言っていました。一度都会に勉強に来て働いても良いけれど、U ターン、J ターン、I ターンとか色々あるように、自分の生まれ故郷で頑張ってもらいたい。そういう気持ちを強く持って自分もお仕事をするので、皆さんもこれから頑張ってください。」

岡田大臣「今日はわざわざ来てくれて本当にありがとう。」

矢野・谷村・赤松・尾崎「ありがとうございました。」